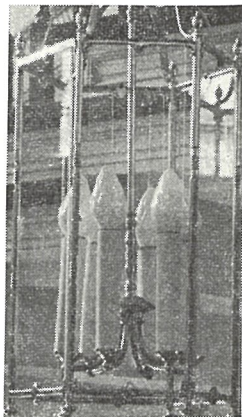


随

想



日 系 人 雑 感

園 部 望

この夏、約一ヶ月間、海外諸大学見学の
ため欧米を旅行する機会に恵まれた。その
際各地で接した日系人についての印象をご
紹介したい。勿論短期間であり、ごく限ら
れた少数の人びとにしか接していないの

で、これをもって全体を推測することは必
ずしも当を得ないと思われるが、ご容赦い
ただきたい。

× × ×

在米の一世は、その大半が明治、大正頃
の移民で、半世紀以上も彼の地にあり、太
平洋戦争中には、キャンプに収容された経
験をもつ人びとである。お逢いした人の中
には九十才をこえる方もあったが、どの顔
にも永年にわたる精神的、肉体的苦勞を忍
耐と努力で克服したしるしでもある深いし
わが刻まれていた。しかし今は二世、三世も
成長し、どの顔にもきびしい試練に打克つ
たものに共通の安らぎと落着きがみうけら
れた。概ね生活は質朴で、善良な米国市民
であるように思われた。ただ、思いは故国
日本や在米同胞のことにあるようで、現在
日本では見かけられない旧い版ぐみの邦字
新聞が相当広範囲に読まれていたのは興味
があった。また半世紀以上も米国にありな
がら、お粗末な英語しか話せない人が多か
ったのは、意外であった。おそらく、もっ
ぱら勤勞に従事していたこと、発音発声が
異り、なじめなかったこと、また人種偏見

などによる差別があって、日系人は日系人
ばかりで生活する傾向があったことなどに
よるのではないかと思われた。五十余年同
志社にあったデントン先生も日本語はお世
辞にも上手とはいえなかったことを思え
ば、已むを得ないといえよう。

× × ×

二世の人びとは、特に太平洋戦争中、敵
国人の一味と目されたり、人種差別をうけ
たことであろうが『わたしは米国人です』
と無言の主張をしているように感じられ
た。両親が家庭では日本語を話すことか
ら、日本語はわかるが、積極的には日本語
を使うことは避け、新しく世帯をもった二
世の家庭では子供に日本語を教えない傾向
があったのではないかと思われた。

× × ×

二世の中には、上・下院議員や、市長、
大学長など社会的に重要な地位にある人も
あるが、おそらく今日の地位を確保するま
では相当な精神的重圧、人いちばい、努
力のあったことだろう。不撓の努力を賞讃
したい。

となっている。黒人問題は人種問題の最たるものと思われるが、黒人の社会的台頭とともに、日系人もその地歩を進めたのではあるまいか。元来各国人種の協同体として自由と自治を求めて出発した米国で、今まで一部にあった根強い有色人種べっ視の風潮が、大きな転換期を迎えていることは否めない。他山の石としたい。

× × × × ×

三世で日本語のわかる人は少ないのではあるまいか。わたしの接した三世の大学生は、最近日本語を習いはじめたのだといっていた。そしてあまりにも父祖の国を知らないことを自覚、日本への深い関心を示していた。こういった日系人を、日本の大学で留学生として受入れる施策があつてほしいと思つた。

なお三世らが相寄り日本について勉強するともに、一世の人々を慰労しようとの動きが芽ばえてきたことをここにご紹介したい。この運動が拡大され発展することを心から祈りたい。

× × × × ×

一世か長期滞在者か見わけがつかない

が、日本からの旅行者——最近急増したとのこと——を相手に、ひどいボロ賭けをしている日系人のあることも知っていたきたい。外国語に弱い日本人はどうしても日系人を頼りたがることから、その弱味につけこんでのあくどい商法は、一般外国人のそれより一層不愉快である。防止策はないものだろうか。

× × × × ×

ある大学を訪ねたとき、若い黒人女性が応接、案内に当たってくれた。あとでわかったことだが、この女性は日本生れで極めて日本語が上手、通訳の人も驚いたほどである。彼女の口から流暢な日本語がでるまで、大ごえで勝手なことをしゃべっていた人びとは、冷汗をかいた。『謹むべきは舌なり』と痛感した。

× × × × ×

欧米の観光地にはどこもこれも日本人が一ぱいである。それも若い人びとが多い。中にはヒッチハイクを計画しているものもあり必ずしも必要経費をもたず無鉄砲に出向いているものもあるようで、ずい分ひどいような人を見つけた。こういった人びとが

在外公館の世話になったり、現地人に迷惑をかけたりすることとなるのではないかと思われた。出国の際のチェックに良策はないものだろうか。国際人としての自覚と訓練が必要であると思つた。

(本部庶務部庶務課長)

音楽随感

中瀬古 和

この夏は、偶然相前後して来日した若い管楽器奏者達の演奏を聴く機会に恵まれた。

その人達の奏法や演奏態度には、音楽についての何か新しい考えを示唆するものがあったが、とりわけ強く印象に残るのは、フェッターというドイツの前衛作曲家の、自作のリコーダー曲の演奏であつた。それは二十人余りの晩餐の席上で、それだけがテーブルから少し椅子を引いただけという、ごく日常的な形で行われた。

バロック時代の音楽が一般の人の間で再

び注目され、その時代の楽器の復活も盛んになったのは戦後であり、当時の楽器（それを模して現代に作られたものをも含めて）で演奏してこそ始めて、作曲者の意図なり時代様式なりがわかるという、歴史的意義を、それは持っていた。古楽器については、私もそのような受取り方しかしていなかった。

素朴な音色と単純な構造を持ったバロックの笛、リコーダーから、フェッターは無心にありったけの可能性を引き出して行った。

幾年か前に手に入れた、海童道の法竹のレコードを、私は想い出さずにはいられなかった。

その解説には、それが普化宗の尺八から出たものであり、吹く人と竹とが一体となつて自然に没入する、といった意味のことが書かれてあった。更に私の興味をひいたのは、美しい音を出そうとすることはすでに邪道である。曲の意味に合わせて楽器は手造りされる。

あるものは道ばたに捨てられた竹から、またあるものは物干竿を切って、などとい

うことであった。管楽器のための前衛作品と呼ばれるものには、現代西洋の楽器に、日本の伝統音楽の吹奏法を取入れていることが多い。

これまで気付かれなかった可能性を開発するという気持はわかるが、実際にはそうした個所に出くわすと、「またあれか」と、マンネリズムを感じないではいられない。ところがフェッターのリコーダー曲の場合にも、そうした技法が使われているのに、何の反発も起こらずに、その曲に引込まれて行ったのは何故だろうか。勿論それは曲自体が納得のいく構造を持っていたからでもあるが。

「あ、そうか」と心の中で叫んだ。ここに古楽器が現代に生きるもう一つの意義がある。リコーダーのような単純な構造の楽器から幅広い表現を生み出すには、一つ一つの音に努力がいる。そしてそれは必然的であり、すでにあるものをぶちこわして別なものを作ろうとするのではない。奏者は一つ一つの音を虚心に自分で創っているのだ。まして奏者と作曲者が同一人物である場合、その音楽のために音自体を創り出す

行為の内に見えざるものへの没入がある。

楽器というものには表現力を拡げるために、また表現技術を容易にするために、改良が加えられて行き、それが進歩というものであろう。しかしまたその進歩は私達を音楽について過保護にしてしまつて、生理的聴覚に注意が傾きすぎてしまう。そして心眼というように、もし心耳という言葉があるとするれば、それは失われて行く。それを取り戻そうとするのが本当の前衛音楽であらう。

古楽器に新しい光が当てられたことは、私にとってまことに清々しい体験であった。（女子大学教授・音楽理論、作曲）

無知たることは

弘 英正

かつての電気化学技術の総本山チッソも、今は公害企業としての虚名をのみ高くしている。最近思うところがあって、僕はそ

の「昭和五、六年までの間に北朝鮮の電力化学コンビナートを完成、いわゆる新興財閥が完成した」（『日本の化学工業』岩波）朝鮮窒素の時代を調べている。手近かな資料としては、まだ朝鮮総督府発行の月刊誌『朝鮮』しかないが、結構おもしろい。

昭和二年朝鮮に進出した日室は「我国第一の生産力を有し、内地最近までの総生産高に近き能力を有するもので、我國硫酸界を支配する重要工場である」（8年10月号）興南工場と赴戦江水電を建設する。厳冬は零下40の広大な高原の面積一・五方里、周囲十九・五里、貯水量実に二四〇億立方尺の貯水池、14万KWの松興里の第一発電所（4年9月号）とその偉容が語られるが、ちょっと気になることがある。

「貯水池の中に入るべき農家は三百四、五十戸で、已に代地を指定して立退を命ぜられてあるといふのに、彼等はどこまでも執着してゐることであつた。」（同号）その執着に対してどのような処置がとられたかは、民族的出版物としての『東亜日報』（金達寿「朝鮮」）等をめくってみ

なければならぬが、『日本統治下の朝鮮』の記述でも大体の察しはつく。

で、7年末の第三期工事完工の翌年に、朝室は電力不足で更に長津江水電（32万KW）を設立する。その一因が、山水特集号の紀行文の声を落した解説部分で語られている。

「此の高原はもと一面に落葉松の自然林で掩はれて居つたが、発電用の貯水池に水をより沢山流入せしむる目的で火を放ちて焼き払ひ切り倒して材木となし興南の工場の建築其他に使用した今も切株の点々として存在するのが認められる。其結果は予期に反して禿山のため、蒸発量の増加せるのと森林なきため水蒸気凝集せず従つて降水量減少せるのとで赴戦湖に溜る貯水量予定計画の如くならず。その後第二、第三の堰堤を赴戦江下流に築造して電力を用ゐて送水してゐる。けれども、発電所では尚予定の発電能力を発揮することが出来ないので従つて興南の工場に於ける硫酸の生産額が予定額に達しない。そこで其欠を補ふために長津江の発電工事が起つたのである。」（10年8月号）正に「砂漠は人間が作っ

た」のである。朝室の技術者は、生態学の常識を知らなかったのか。同じく今日、チツソの技術者は水銀流出を「知らなかった」ので過失責任はないという。無知たることは免罪符たりうろのか。

9月29日、新潟水俣病裁判において「チツソ水俣工場」とは製造工程が異り、同列には論じられない。」「当時、業界で工場排水を水俣病の原因と信じたものはなかった。」故に「会社には故意はもとより、過失の責任もない」としていた被告の敗訴が確定したが、患者の存在が明らかになつた40年暮、製造工程図を焼却した（45・10・6鹿瀬工場有機課長証言）ことによつて有機水銀の「生成・流出の有無を確定することができないことを、判決理由は遺憾としている。現法体系の下では、無知を装うことが企業にとつて有利になる。

来年一審判決の下る熊本水俣病裁判でも、原告は有機水銀に関しては「専門学者ですら知り得ない事柄であつた」（被告答弁書）その過失責任を注意義務で撃っている。「予見可能性は水俣工場の廃液が人体

（35頁へ）